プロレタリアートの独裁の条件

三

これまで私は二つの決議案のうちの第一のものについて述べてきた。第二の決議案もこれよりましではない。そこでは、「まぜこぜ」を、それどころか「いっさいの妥協」（《toute compromission》）を「おごそかに」（《solennelle》）非難している（これはからっぽな革命的言辞である。なぜなら、**いっさい**の妥協に反対することはできないからだ）。それと同時に、きまり文句を回避的な、中途半端なやり方で、つまり、プロレタリアートの独裁の概念を説明せず、それをあいまいにするようなやり方で、繰りかえし、「クレマンソー氏の政策」を攻撃し（これは、徒党の交代を制度の交代のように見せかける、フランスの政治屋のありふれたやり方である）、基本的には、**改良主義的**な綱領――租税、「資本主義的独占体の国有化」、等々――を述べている。

革命的空文句のかげにかくれた改良主義こそ、第二インタナショナルの主要な害悪であったこと、これこそ、第二インタナショナルの崩壊の主要な原因であったこと、すなわち、資本家的略奪者のイギリス＝ロシア＝フランス・グループとドイツ・グループのどちらが全世界を略奪するか、という大問題を解決するために 2000 万の人間をころした戦争を、「社会主義者」が支持した主要な原因であったこと、これらのことをロンゲ派は理解できなかったし、また理解**しようとおもっていない**（いくぶんは理解する**能力がない**）のである。

ロンゲ派は、実際には依然として、自分たちの改良主義を革命的空文句でかくしている昔どおりの改良主義者であって、ただ革命的な空文句として、「プロレタリアートの独裁」という新しい言葉をつかっているだけである。こういう指導者も、ドイツの独立社会民主党の指導者も、イギリスの独立労働党の指導者も、プロレタリアートには必要でない。プロレタリアートは、こういう指導者といっしょに自分の独裁を実現することはできない。

プロレタリアートの独裁を承認することは、時を**えらばず**、なにがなんでも強襲や蜂起にすすむということではない。そんなことはばかげている。蜂起が成功するためには、長期にわたる、巧みな、ねばり強い、そして大きな犠牲を要する準備が必要である。

プロレタリアートの独裁を承認することは、第二インタナショナルの日和見主義、改良主義、中途半端、言いぬけとの絶縁、古い伝統をつづけ**ないわけにはいかない**指導者、古い（年齢においてではなく、そのやり方の点で）代議士や、労働組合や、協同組合の官僚などとの絶縁を、決定的に、容赦なく、――そしてこれが肝心なことだが――まったく意識的に、まったく首尾一貫して、実行することである。

彼らとは手を切らなければならない。彼らにあわれみをかけるのは犯罪である。それは、数万人または数十万人のけちな利益のために、数千万人の労働者と小農民の根本的な利益を売りわたすことである。

プロレタリアートの独裁を承認することは、党の日常活動を根本的にやりかえることであり、下のほうへ、すなわち、**ソヴェト**がなければ、ブルジョアジーを打ちたおさないでは、資本主義と戦争の災禍から救われえない幾百万人の労働者、**雇農**、小農民のところへ、おりていくことである。このことを大衆に、幾千万の人々に、具体的に、簡単明瞭に説明すること、**彼らの**ソヴェトが**全**権力をにぎり、**彼らの**前衛、革命的プロレタリアートの党

が闘争を**指導し**なければならない、と彼らにかたること、――これが、プロレタリアートの独裁である。

ロンゲ派には、この真理を理解している痕跡すらないし、それを毎日実行しようとする願望と能力はつゆほどもない。　1920年2月14日

第30巻『政論家の覚え書』P366～367

ポイント

プロレタリアートの独裁を承認することは、第二インタナショナルの日和見主義、改良主義、中途半端、言いぬけとの絶縁、古い伝統をつづけないわけにはいかない指導者、古い（年齢においてではなく、そのやり方の点で）代議士や、労働組合や、協同組合の官僚などとの絶縁を、決定的に、容赦なく、まったく意識的に、まったく首尾一貫して、実行することである。

プロレタリアートの独裁を承認することは、党の日常活動を根本的にやりかえることであり、下のほうへ、すなわち、ソヴェトがなければ、ブルジョアジーを打ちたおさないでは、資本主義と戦争の災禍から救われえない幾百万人の労働者、雇農、小農民のところへ、おりていくことである。このことを大衆に、幾千万の人々に、具体的に、簡単明瞭に説明すること、彼らのソヴェトが全権力をにぎり、彼らの前衛、革命的プロレタリアートの党が闘争を指導しなければならない、と彼らにかたること、――これが、プロレタリアートの独裁である。